



パイプオルガンリサイタル ～パイプオルガンにおける足鍵盤の意義～

講師	酒井多賀志 (東京純心大学客員教授)
開講日時	11月17日(土) 14:00開演 (13:30開場)
会場	東京純心大学 (江角記念講堂)
内容	演奏曲目 D. ブクステフーデ：前奏曲、フーガとシャコンヌ ハ長調 BuxWV137 J.S. バッハ：前奏曲とフーガ 二長調 BWV532 F. メンデルスゾーン：オルガンソナタ第1番 ヘ短調 Op.65-1 C. フランク：コラール第3番 イ短調 酒井多賀志：「夕焼け小焼け」の主題による変奏曲 Op.48 ：幻想曲「一陽来復」Op.74 他
対象	指定なし
定員	800名(先着順)
受講料	無料

講師プロフィール

1972年東京藝術大学オルガン科大学院修了。1970年万国博オルガン・コンクールで最高位入賞。1981年作曲にも着手、1992年「流離」をオックスフォード大学出版局から出版。数多くのCDをリリース。2011年DVD「響きわたる音の神殿パイプオルガン」をリリース。カトリック吉祥寺教会オルガニスト、東京純心大学客員教授、日本演奏連盟会員。

講師からみなさまへ

鍵盤楽器の中で、オルガンの際立った特徴は、手鍵盤の音域の半分以上ある足鍵盤の存在です。このような形はブクステフーデが活躍した17世紀からですが、それにより、オルガン音楽は独自の世界を作り上げることになりました。バッハの音楽の深みと、躍動感足鍵盤の存在が深く関わっています。彼に続くオルガン音楽の作曲家もそのことを踏まえ、今回それを探ります。

